

意見陳述書

2017年2月1日
安 達 葉 子

1 私は、高浜原発の風下 130 キロ、愛知県春日井市に住む元高校教師です。昨年まで教壇に立ち、私はそこで格差社会の中で置き去りにされ、その日その日の命を繋ぐのに精一杯で生きている生徒の姿を見て来ました。原発を1日動かすだけで何億もの利益を得て、1年に何千万円という報酬をもらう電力会社の役員や、大事故を起こしても倒産を免れている会社の人にとっては、もしかしたら想像もつかない世界かもしれません。

原発の再稼働が象徴する、経済を優先する社会の中で、子どもたちがどのような生活を強いられているのか、私の経験を話させていただきます。

2 両親がいないため、全て自分で生活費や学費をバイトにつぐバイトで稼ぎ、朝は菓子パン一つ、昼食はなし、夜はバイト先で残り物をもらう。そんな状況を見かねた級友たちが順番に昼食を作り、分け合って食べている。ある時「明日先生弁当作ってくれる？おにぎり一つでいいから」と言われ、次の日私が葉蘭で包んだ手作り弁当を渡した時の驚きの目。そして下校時に遠くの方から「お母さん、お母さん、ありがとう、おいしかったよ」と大きな声で叫び、バイト先に走って行った後、瞬間、周囲が静まり返る中で、ある子が「あの子は、お母さーん、と言いたかったんだね」と涙ぐんでポツリと言いました。

また、ある生徒は、提出用紙の裏に「バイト、バイトばかり。なのに金がない。疲れた。家庭が崩壊しそう、父が死にそう。体がボロボロ、ストレスにストレス。死ぬのが怖い。もう考えることさえ面倒くさい。考えてもどうにもならない。」と書き綴っていました。こんな絶望感の中でも、級友の前では普通にして必死に生きています。

3 これまで数えきれないほどの生徒を送り出しながら、どの子にも明るい未来をと願ってきましたが、子どもの6人に一人が貧困と言われるように、この国は既に子どもを全く大事にしない国になっています。

福島原発事故とその後国がやってきたことを見て、私はますますそれを確信しました。福島事故で避難してきた子どもへのイジメ。これは親社会の反映です。子どもにもその親にも何の落ち度も責任もないのにです。実際、

原発事故被害者への十分な補償もなく、健康影響の調査すらまともに行われない。行政の被曝影響に対する冷淡さは驚くばかりです。事故前の基準の20倍である年間20ミリシーベルトまで住民に受忍させています。特に放射線による被曝影響は子どもほど大きいため、子育て世代は経済的に苦しくても自力で避難せざるを得なかったり、諸事情で避難できない家は、子どもの健康に不安を覚えたりしながらも、被曝を我慢しながら暮らさざるを得ない状況なのです。

- 4 こうした現実がありながら、40年も使った高浜原発を、廃炉ではなく更に20年延長するというのは、命より経済優先、つまり企業の利益を優先するということです。一度造った原発は、老朽化して安全性が低下していても、事故が起きる前まで使い倒せば莫大な利益を産むからです。そしてその結果もつとも収奪されるのが子どもたちです。増え続ける核のゴミの管理をしていくのは子や孫の世代。福島原発の事故処理費用が既に21.5兆円にのぼり、更に膨張していくと言われていますが、その費用の多くを実際に払って行くのも将来世代です。老朽原発を無理に稼働して大事故が起きれば、更にそれも将来世代にツケ回しされます。その上、原子力発電は、人がこの地で命を繋いでいくために先祖から預かった水や自然環境すら担保に入れてしまうのです。現世代の利益を追求し、子どもたちの分まで強欲に消費していくシステム。それが原子力ではないでしょうか。
- 5 私が見て来た生徒たちは、このような経済優先の政策の方向を知るよしもなく、例え知っても声をあげる余裕がないのです。せめて将来を担う生徒たちが安心して吸える空気、環境を残したい。私はここに声を届けられない生徒たちの声の代弁者として、気がついた者の責任として、また40数年にわたり「命とくらしを守り自立した生活者の育成」を教科目標に掲げ指導してきた一教師として、命を脅かす原発にはNOと言いつけ、高浜原発の廃炉を訴え、その生き方を貫きたいと思います。

以 上